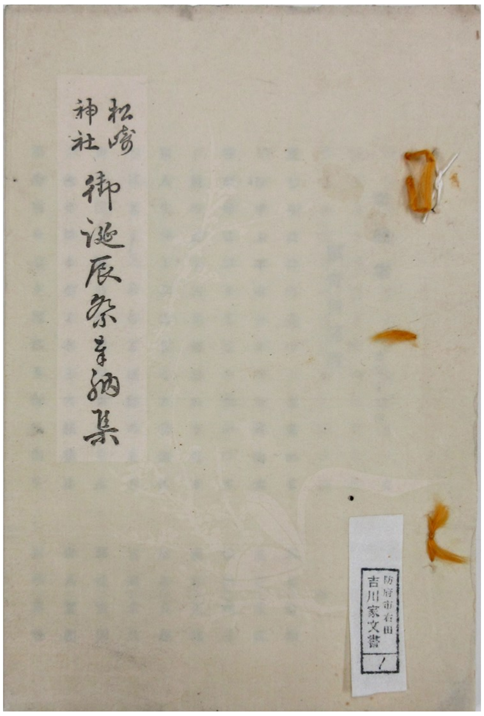
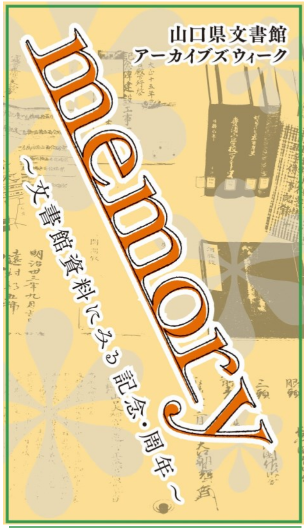




✻ 8

松崎神社御誕辰祭奉納集（吉川家文書1）

その日 ❸

誕生日をまつる

《天満宮の御誕辰祭》

仏教の灌仏会、キリスト教のクリスマスのように、神道(神社)で祭神の誕生日に何かをする例はあまりありません。菅原道真を祭神とする天満宮は、祭神の誕生日に祭を行う、数少ない神社のひとつです。

現在、太宰府、北野をはじめ各地の天満宮で、菅原道真の誕生日である6月25日に祭礼を行っています。当然、道真の誕生日は旧暦ですので西暦に合わせて調整していますが、それを現在の暦のどこに設定するかは神社によって様々です。

祭礼は「御誕辰祭」と称することが多いようです。「誕辰」は誕生日のことで、近世までは主に貴人の誕生日に対して使われていました。

《近代防府天満宮の御誕辰祭》

今回取り上げるのは松崎天満宮(松崎神社、現防府天満宮)の御誕辰祭です。

同社の御誕辰祭の式日は、明治5年(1872)の西暦移行後、7月21～25日となっていましたが、明治43年に8月3～5日へと変更されます。これは、同社が祭日全般について、旧暦(太陰太陽暦)の日付を同年の西暦の日付に計算して設定し直したためです(防府天満宮『防府天満宮神社誌』社史編、2005年)。旧暦の日付をそのまま使用する例や1ヶ月後ろにずらす例が多い中、特色ある取り組みでした。

祭の様子は、新聞等から窺えます。例えば、『防長新聞』明治33年7月22日号、24日号には、参道に数多の提灯が並ぶ中、「煙火(はなび)」や囃子、踊り、義太夫、軽業、飾り物等が出て、多くの人で賑わった様が描かれています。

また、「周防宮市松崎神社略誌」(御薗生翁甫文庫447、昭和3年(1928))等のような小冊子類には、見世物・興行の他、詩歌の献詠や清書の奉納による奨学祈願に加え、剣道の試合等が行われたことが記されています。「学問の神様」ならではの内容です。

上の写真は、明治32年の御誕辰祭の際に奉納された詩歌集です。表紙は薄緑

周防府松崎天神
鎮座考　上下
(荒瀬家文書(防府市)
246・247)

嘉永2年(1849)版行の国学者弘正方(ひろ　まさかた)による防府天満宮の由緒です。天満宮関係者による「松崎祠実録」(次頁参照)には書かれている菅原道真の誕生日が、こちらでは「某月日」となっています。情報の流れ方等を考えると興味深い資料です。

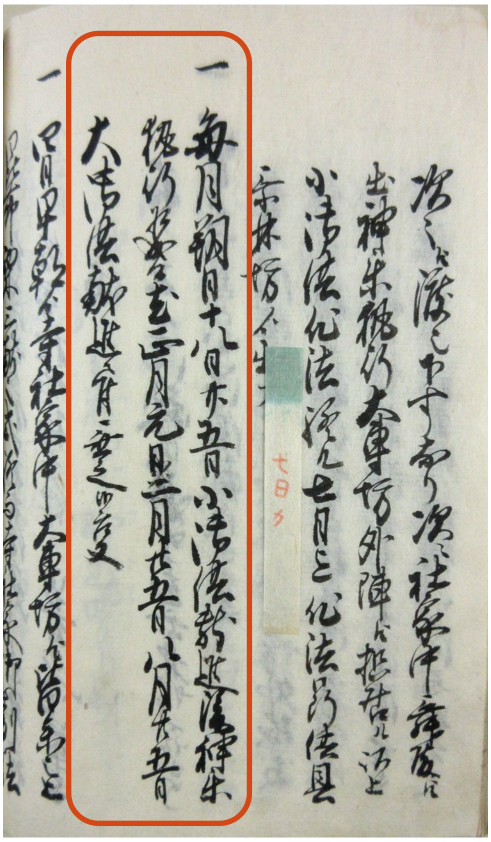
の地に、白抜きで梅と冠が描かれています。中は崇敬者による連歌、和歌、俳句、漢詩文と、あらゆる詩歌により構成され、和歌にも漢詩文にも巧みであった祭神にあやかるものとなっています。神社の祭礼で和歌や俳句が奉納される例は多くありますが、連歌に漢詩文までとなると多くはないようです。これも天満宮ならではのものといえるでしょう。なお、奉納者のほとんどが旧周防国域の人です。

《江戸時代の御誕辰祭？》

現代においても清書の奉納や柔道・剣道の大会、各種イベントと花火で賑わう御誕辰祭ですが、『防府天満宮神社誌』に起源についての言及はなく、同書内に事例として挙げられているのは近代以降のものです。

また、松崎天満宮が自社の由緒等を記して藩へ提出した寺社由来(「東佐波令　天満宮」(県庁伝来旧藩記録寺社由来555)、刊本『防長寺社由来』3)や、風土注進案(「東佐波令之上」(同　風土注進案126)、刊本『防長風土注進案』10)に他の祭礼が記載されている中、御誕辰祭の記述は確認できません。これらの資料は藩への正式な報告ですので、年中行事や毎月の祭祀等については漏れや誤りのないように作成されるものです。ここに記載がないということは、「御誕辰祭」として催行されてはいなかったと考えるのが穏当でしょう。

代わりに行われていたと考えられるのが、毎月1日、18日、25日に行われる祭祀で、寺社由来、風土注進案共に記載があります。供御を献じ、神楽を奉納するもので、規模の大小があり、元日、2月25日、8月25日(秋祭)の3日は大御供、その他は小御供を献じました(上写真)。



風土注進案　東佐波令之上
（県庁伝来旧藩記録　風土注進案126）

囲み部分が月次祭に関する記述で、「一、毎月朔日、十八日、廿五日、小御供献進後、神楽執行相成候、尤正月元日、二月廿五日、八月廿五日、大御供献進ニ付無之候事」とあります。

月次祭がこの3ヵ日である理由として、近代以降の資料では、「一日は月の初日に当り、十五日は月参講社の祈祝の為。二十五日は菅公に御縁故の深き日なるを以て此の三日を古来月次の御祭日と定めたるものなり。」(「周防宮市松崎神社略誌」)等と説明されています。6月25日が誕生日であるだけでなく、菅原道真は延喜元年(901)正月25日に大宰府配流の詔を受け、同3年2月25日に薨去しました。25日は「御縁故の深き日」でした。

ただし、忌日にあたる2月25日は大御供、配流詔の正月25日や誕生日の6月25日は小御供と、供御の規模に差がありました。延享2年(1745)に松崎天満宮の神宮寺である大専坊の僧侶文済による「松崎祠実録」(防府天満宮蔵。ここでは当館蔵の近代山口県史編纂所による謄写本(県史編纂所史料329)を参照)に道真の誕生日が記されていることを考えると、当時の天満宮の神職等は道真の誕生日を把握していたと考えてよいでしょう。そのような中でも祭祀の規模に差が付けられていたことから、江戸時代における忌日の優先度の高さが窺えます。

《誕生日観の変化と御誕辰祭》

このように、菅原道真の誕生日の祭祀が神職のみによる月次祭から、御誕辰祭に変化するのは近代に入ってからのようです。

誕生日の捉え方の変遷については、誕生日を祝うこと自体は近世以前も行われていたようですが、それは個人の記念日であって、祈祷や参詣と身内(家中)で祝うものであったそうです。それが開国後、欧米文化に触れる中で、天皇(や将軍)の誕生日が全国民に対して適用される「休日」(祝日)になっていったことが指摘されています(鵜澤由美「近世における誕生日―将軍から庶民まで そのあり方と意識―」、『国立歴史民俗博物館研究報告』141、2008年)。

誕生日の祭祀が、身内(神職)による供御からオープンな祭へと変化していく様は、このような誕生日観の変化に合わせたものだったのかもしれません。